

ヨーガ派における 慈・悲・喜・捨の修習と四無量

遠 藤 康
(名古屋大学)

1. はじめに

仏教では四無量、四梵住などと呼ばれる慈・悲・喜・捨の四項目からなる修習が説かれる。この修習はヨーガ派の根本典籍『ヨーガスートラ (YS)』1.33にも説かれ、現存最古注『ヨーガパーシュヤ (YBh)』では心 (citta) の浄化実習 (parikarma) のひとつとされている。YS にはこの他にも様々な仏教との類似点が見られ、また YBh には説一切有部からの強い影響が確認されるため、ヨーガ派と仏教の両者に強い関係があったと考えられているが、この修習の起源についてはヨーガ派、仏教、バラモン教、ジャイナ教など諸説がある。⁽¹⁾ 本稿では、先行諸研究によりつつヨーガ派における慈悲喜捨の修習の特質と伝承のあり方を、仏教との関係を軸として考察してみたい。⁽²⁾

2. 『ヨーガスートラ』と『ヨーガパーシュヤ』に見られる 慈・悲・喜・捨の修習

慈悲喜捨の修習は YS では2箇所 (1.33, 3.23) で、さらに YBh 4.10 で言及される。それらのうち本稿に必要な YS, YBh 1.33 と YBh 4.10

を挙げよう。鍵括弧内はストラ部分を示す。

YS, *YBh* 1.33.

その存続している心について、論典により次のような浄化実修が教示される。それはどのようにか。

『楽、苦、善、不善を対象とする慈、悲、喜、捨の修習から、心を清澄にすることがある。』

それら〔四種〕の中で〔慈の修習は〕、楽の享受を得ているすべての生き物達に対して慈しみ（友愛）を修習せよ〔というものである〕。苦しんでいる者達に対しては哀れみを〔修習する〕。善なる本性を持つ者達に対しては喜びを〔修習する〕。不善な性質を持つ者達に対しては無関心を〔修習する〕。

このように修習しているこの者には、白いダルマ（特性）が生じる。それから心は清澄になる。清澄になった〔心〕は、一点集中という安定状態を獲得するのである。（*Ānandāśrama Sanskrit series*, no. 47, p. 38, l. 8-p. 39, l. 2）

YBh 4.10.

……しかし、本来的な事物は機会因を持たない。それ故に、無始以来の潜在印象が染み込んだこの心が、機会因の力によって、まさに何らかの潜在印象を得て、プルシャの享受のために〔プルシャに〕自らを向けるのである。

瓶と宮殿の〔中にある〕灯火のように、縮小拡大するものである心は、ちょうど身体の大きさと形なのであると、他の者は考える。そしてそのようであるから、中間の存在（中有）と輪廻が道理に合うのである、と〔も彼らは考える〕。〔しかし、〕「この遍在する心にある縮小拡大するものは作用に他ならない」と師は言う。

そしてそ〔の心の作用の縮小拡大〕は、善悪の機会因に依存する。また機会因は外的と内的の二種である。身体など手段となるものに依存するのが、賞賛、布施、敬礼などの外的〔機会因〕である。心だけに依存するのが、信〔、精力、注意力、精神集中、智慧〕などの内的〔機会因〕である。それについて次のように言われる。「これら慈など〔すなわち慈、悲、喜、捨という〕瞑想者達の住処 (vihāra) というもの、それらは外的手段の補助に抛らないという本質を持つものであり、卓越した善を達成させる。」

それら〔内的外的機会因の〕両者うちでは、心的なものがより強力である…… (p. 182, l. 11-p. 185, l. 2)

慈悲喜捨の修習は YS 1.33 で定義される。これを含む YS 1.30-40 はテキストとしての一貫性を欠くとされ、Bronkhorst は1.30-40までのうち1.33-39までを心の安定性に至る諸手段を説くひとつのグループとし、さらにこれは原初的には1.33, 34, 39の一群と1.32, 35, 36, 37, 38, 40の一群として別々に伝承されてきたものを YS 作者あるいは YBh 作者が配列し直して編纂したものであるという見解を表明した。⁽⁴⁾ この見解を検討する余裕はないが、慈悲喜捨の修習が、YS 成立以前から、編纂者(作者)が権威として認める伝承中に存在していた可能性が示唆されている点を確認しておきたい。

3. 『ヨーガバーシュヤ』が伝える

『ヨーガストラ』1.33以外の伝承

上掲 YBh 4.10 から、YS との年代的前後関係は不明ながら YS の定義以外に慈悲喜捨修習に関してなんらかの伝承あるいは典拠が存したこと

は推察できる。YBh 4.10 は難解であるが、今は、ヨーガ行者が多数の身体を化作する際に、外的な機会因 (bāhya-nimitta) と「信など (śrad-dhādi)」の内的機会因 (ādhyātmika-nimitta) によって心作用の拡大縮小が起こるとされる点を理解すれば十分かと思われる。そして内的原因に関連して、「慈など (maitryādi)」に言及する者たちの言葉が、出典不明ながら「tathā cōktam」として引用されるのである。Jacobi はこの引用に見える vihāra という言葉から「慈など」とは仏教の四梵住 (brahma-vihāra) であり、それがヨーガ派に伝わっていたと考える⁽⁵⁾。YS 1.20 は信勤念定慧という仏教の五根・五力に相当するものを説く。したがって、この YBh 4.10 で「信など」とは信勤念定慧、「慈など」とは慈悲喜捨であることはほぼ間違いない。

YBh が仏教説を「tathā cōktam」として引用することはない。したがって、この「慈など」に言及する学匠は仏教徒ではない。この個所から、YS に言及される信勤念定慧および慈悲喜捨という実修法、すなわち仏教の五根と四無量に相当する実修法が、YS の定義としてだけでなくヨーガ派あるいは密接な関係にあるグループにおいて伝承されていたと確認される。

4. 五根と『ヨーガパーシュヤ』

では、これら二つに関する伝承はどれほど確固かつ詳細なものとして YBh 作者に知られていたのだろうか。まず信勤念定慧を説く1.20から考察してみよう。

YS, YBh 1.20

『他の者達には、信、精力、注意力、精神集中、智慧に基づいて起

こる〔認識を伴わないサマーディ〕がある。』

ヨーガ行者達には手段を原因とする〔認識を伴わないサマーディ〕がある。信とは心の清澄である。それは善い母親のようにヨーガ行者を保護する。信を持ち〔プルシャと心との〕識別を目指しているか〔の行者〕に精力が生じる。精力が生じた者には、注意力が現れ出る。注意力が現れ出ている場合には、心は散乱せずに集中させられる。心が集中した者には、智慧に基づく識別が起こってくる。そ〔の識別〕により、事物をありのままに〔行者は〕知るのである。こ〔これらの手段〕の実修に基づき、そして〔ありのままに知られた〕すべて〔の事物〕を対象とする離欲に基づき、認識を伴わないサマーディが〔ヨーガ行者達に〕生じるのである。(p. 23, ll. 4-20)

既に Jacobi や La Vallée Poussin により一部指摘されているが、『俱舎論』中に上記 *YBh* の下線部分に酷似した文章が見られる。それらを対比して示そう。

YBh : śraddhā cetasaḥ samprasādaḥ /

俱舎論 : tatra śraddhā cetasaḥ prasādaḥ / (ad 2.25 : Pradhan 2nd. ed, p. 55, l. 6)

YBh : tasya hi śraddadhānasya vivekārthino vīryam upajāyate /

俱舎論 : śraddadhāno hi phalārthaṃ vīryaṃ ārabhate /

YBh : samupajātavīryasya smṛtir upatiṣṭhate /

俱舎論 : ārabdhavīryasya smṛtir upatiṣṭhate /

YBh : smṛtyupasthāne ca cittam anākulaṃ samādhiyate /

俱舎論 : upasthitasmṛter avikṣepāc cittam samādhiyate /

YBh : samāhitacittasya prajñāviveka upāvartate / yena yathārthaṃ vastu jānāti /

俱舎論：samāhitacitto yathābhūtaṃ prajānāti / (ad 6.69 : p. 384, ll. 12-14)

『俱舎論』6.69の五根の次第に関する記述と類似するものは『雜阿毘曇心論』巻8 (T. 28 : 938b10-15) にも見られるが、管見の限り他の有部アビダルマ文献には見出せなかった。しかし『雜阿毘曇心論』は信から精進が生じる点を「信已捨惡修善故精進方便」とするので『俱舎論』と梵文が相違していた可能性がある。また *YBh* が有部四論師の所説に基づき転変説を解説する個所で『俱舎論』を参照すること、三世実有説についても参照している可能性が高いことが指摘されているので、⁽⁶⁾ ここでも *YBh* は『俱舎論』に依拠したと考えられる。つまり、奇妙なことに、*YBh* はヨーガ派内部あるいは密接な関係にあるグループでの伝承を知っていたにもかかわらず『俱舎論』に依拠して *YS* 1.20 を注釈したのである。

5. 仏教の四無量

上記に対して、慈悲喜捨に関する上掲 *YBh* 1.33 は、『俱舎論』とは全く一致しない。ちなみにパーリ・ニカーヤ中および北伝アーガマ中の四無量・四梵住の記述と *YS*, *YBh* の記述を比較した場合にも、四項目の名称以外ほとんど共通性を見出せない。⁽⁷⁾

『俱舎論』での四無量についての特徴を、今の考察に必要な瞑想内容および対象に限って記せば次のようになる。瞑想内容すなわち形相 (*ākāra*) は、「有情らは実に楽しんでいる」、「有情は実に苦しんでいる、〔苦より解放されますように〕」、「有情は実に喜びますように」、「有情がいる」というものである。対象は欲界の有情であり、親しい者から敵まですべてを対象とし、例えば慈修習の場合は友人など容易な対象から始めてい

くとされる。⁽⁸⁾

YBh 1.33 が『俱舎論』に依拠せずに慈悲喜捨の修習を解説するのは明白だが、『俱舎論』が記す四無量と *YS* 1.33 で決定的に異なる点は、所縁つまり瞑想対象である。仏教ではすべての有情を対象として修習するのに対して、*YS* は慈の対象は楽ある有情、悲は苦ある有情、喜は善なる有情、捨は不善なる有情とする。したがって、*YS* 1.33 が仏教と同じであるのかといえば決してそうではない。慈（友愛）の対象を楽ある有情、捨（無関心あるいは平静）の対象を不善なる有情に限定するなどして修練するのであるから、極めて仏教的でないといえる。⁽⁹⁾ *YBh* は基本的にそれにしたがっているものであり、慈の注釈文に「すべての生き物 (*sarvaprāṇin*)」を付加する点がわずかに仏教に近づいた印象を与えるだけである。

6. 『ヨーガバーシュヤ』の『俱舎論』依拠とヨーガ派の伝承

『俱舎論』に依拠して *YS* 1.20 を注釈した *YBh* 作者が仏教の四無量を知らなかったはずはない。では何故1.33では依拠しなかったのであろうか。高木神元博士は *YBh* が転変説解釈において有部説を援用する理由として、同書が多くを依存するサーンキャ派古師ヴァールシャガニヤと有部とが近い関係にあったと推定されることを挙げている。⁽¹⁰⁾ 確かに転変説についてサーンキャ派と有部の古師達がある種の共通学説を持っていたことは推測される。しかし、さらにつきつめて *YBh* が『俱舎論』に依拠する理由を考える必要がある。サーンキャ派と有部との交流は、*YBh* 作者が仏教に依拠する必要が生じた場合には有部文献を用い、そして作者の年代などの都合で最適な文献として『俱舎論』が選ばれたことの原因にはなるであろう。けれども、何故彼に仏教説を用いる必要が生じたのかを説明する理由

がさらに必要なのである。

Bronkhorst は *YBh* 作者がヨーガ実践に暗かったと推測している⁽¹¹⁾。これが正しいとすれば、五根に関しても経験のなさを補うために仏教文献を用いたと考えることも出来よう。しかし何故仏教文献だったのだろうか。同じく Bronkhorst は、*YBh* 作者は特定のストラと密接に結びついているがストラに言及されない伝承を知っていたと見られる個所があると指摘する⁽¹²⁾。これに基づき逆に考えれば、*YBh* 1.20 が『俱舎論』を用いる理由は、作者が詳細な伝承を持たなかったためではなかろうか。仏教では古くから五根を体系化していたと考えられるが、ジャイナ教資料には五根は見られないとされる⁽¹³⁾。しかし、ヨーガ派や関係学派に十分な伝承が存在していたのであれば仏教文献に依存する必要はなかったであろう。*YBh* 作者がヨーガ派や関係学派に *YS* 1.20 という形あるいは他の形でこの実修法の伝承が存在するのを知っていたが、それは詳細ではなかったと仮定した場合のみ、それについて豊富な伝承を持つ仏教とそれを整理して伝えた『俱舎論』を用いる必要性が理解できる。自派の伝承が十分だったならば、『俱舎論』に依拠する必要などないからである。

では、他方1.33で『俱舎論』が用いられなかった理由は何であろうか。この理由は *YS* 1.33 自体が明確に仏教とは異なる形で四種の瞑想対象を述べていたためではないかと筆者は考える。*YS* 1.20 は五種の項目名を挙げるのみであったし、その他の伝承も不十分であった。そのため、*YBh* 作者は『俱舎論』を用いることができた、あるいは用いざるを得なかった。それに対して1.33は仏教とは異なる形で慈悲喜捨の修習を伝えている。つまり、ある程度十分な伝承が存在したために仏教文献に依存せずに注釈可能であったし、また依存することは出来なかった。このように筆者は考えるのである。

ではヨーガ派の慈悲喜捨修習の伝承の起源は仏教ではなかったのだろうか。現時点でそう断言する根拠はない。しかし、この起源をジャイナ教と関係づける見解には留意すべきであろう。筆者はジャイナ教については全くの門外漢ではあるが、『タットヴァールターディガマストラ』7.6には「生きものに対しては慈を、高德者に対しては歓喜を、悩まされているものに対しては悲を、粗野なる者に対しては無関心を」修習すると述べられるという。⁽¹⁰⁾四項目の名称と順序は異なるが、対象としての有情の設定はYS とほぼ同じである。

7. 結 論

以上、『ヨーガストラ』に見られる慈悲喜捨の修習について、その特質とヨーガ派での伝承のあり方を、仏教との関係を軸として考察してみた。要点を再提示し結論としたい。

1. 慈・悲・喜・捨の修習と信・勤・念・定・慧の修習については、*YBh* 以前のヨーガ派あるいは関係学派において *YS* 以外に何らかの伝承があったと思われる。
2. *YS* の慈・悲・喜・捨の修習は瞑想対象となる有情の設定で仏教の四無量とは異なり、仏教的ではない。この点ではジャイナ教の所説と共通点を持つ。
3. *YBh* は、信・勤・念・定・慧の修習についてはヨーガ派の伝承が不十分だったため『俱舎論』に依拠して注釈したと推測される。慈・悲・喜・捨の修習については *YS* が仏教的ではなかったため『俱舎論』に依拠して注釈しなかったと推測できる。
4. 上記によってヨーガ派の慈・悲・喜・捨の修習の起源が仏教でない

とは断言できないが、ジャイナ教との関係も考慮されねばならない。

注

- (1) ヨーガ派と仏教の関係については、金倉圓照「ヨーガ・スートラの人間像」『インド哲学仏教学研究II(インド哲学篇1)』春秋社 1974年, pp. 235-282, 同「ヨーガ・スートラの成立と仏教との関係」同書 pp. 283-297, 木村泰賢「印度仏教と瑜伽哲学との交渉(特に三世実有論を主として)」『阿毘達磨論の研究(木村泰賢全集第4巻)』大法輪閣(初出『思想』1922年) 1978年, pp. 351-377, Hermann Jacobi, “Über das ursprüngliche Yogasystems”, *Kleine Schriften*, teil 1, Wiesbaden, 1970 (初出1929), 同“Über das ursprüngliche Yogasystems: Nachträge und Indices”, *Kleine Schriften*, teil 1 (初出1930), Louis de La Vallée Poussin, “Le Bouddhisme et le Yoga de Patañjali”, *Mélanges Chinois et Bouddhique*, 5: 1936-1937, Bruxelles, 1937, シチエルバトスコイ(金岡訳)『小乗仏教概論』理想社 1963年, 今西順吉「インド哲学と因果論」『仏教思想3「因果」』平楽寺書店 1978年, 村上真完「永遠の有と転変: サーンクヤ哲学と仏教」『仏教思想史2: 仏教と他教との対論』平楽寺書店 1980年, 高木諄元『古典ヨーガ体系の研究』法蔵館 1991年, Koichi Yamashita, *Pātañjala Yoga Philosophy: with Reference to Buddhism*, Calcutta: Firma KLM, 1994 など参照。
- (2) この修習はジャイナ教でも『タットヴァールターディガマスートラ』以来諸文献に見られ、平野真完「阿含における四梵住について」『法然学会論叢』創刊号 1960年, pp. 77-78に、その起源をヨーガ派, バラモン教, 仏教とする諸説がまとめられている。仏教起源説は中村元『慈悲(サーラ叢書1)』平楽寺書店 1956年, p. 41, 同『原始仏教の思想I(中村元選集[決定版]15巻)』春秋社 1993年, p. 747, p. 751-752, 注28に表明される。しかし、平野前掲論文(pp. 90-91)はジャイナ教やアーजूヴィカ教との関係に注目し、Johannes Bronkhorst, *The Two Traditions of Meditation in Ancient India*, 2nd. ed., Delhi: Motilal, 1993, pp. 93-95 もジャイナ教との関係に注目している。
- (3) 学会発表時にはこの「論典により (sāstreṇa)」という語が YS 以外の論典を意味するのではないかと述べたが、これは YS を意味していると訂正したい。この点については大阪大学の榎本文雄先生にご指摘を頂いた。記して感謝の意を表したい。
- (4) Johannes Bronkhorst, “Patañjali and the Yoga sūtras”, *Studien zur*

- Indologie und Iranistik*, 10, Reinbek., 1985, pp. 197-203. Tilmann Vetter, “Zum ersten Kapital der Yogasūtras”, *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für indische Philosophie*, Band 33., Wien, 1989, p. 174, ll. 37-40 も参照されたい。
- (5) Jacobi, “Über das ursprüngliche Yogasystems : Nachträge und Indices”, p. 727.
- (6) 転変説に関して *YBh* が『大毘婆沙論』など他の有部論書ではなく『俱舍論』を参照した点は Yamashita 前掲書 pp. 48-53 にやや不明瞭ながら指摘される。三世実有説については高木前掲書 pp. 136-137。
- (7) 平野前掲「阿含における四梵住について」, p. 78によればパーリ・ニカーヤ中の四無量・四梵住の記述はほぼ定型で表現されるという。詳細は同論文を参照されたい。北伝アーガマに定型があったかどうか筆者には未詳だが、梵文については *Mahāvīyutpatti* 1508, 1509 (榊亮三郎『梵蔵漢和四譯對校翻訳名義大集』国書刊行会 1981年, p. 116), 釋惠敏『「声聞地」における所縁の研究』山喜房仏書林 1994年, p. 187, 注1, *Śrāvakabhūmi*, ed. by K. Shukla, p. 208, l. 6, p. 208, l. 9, p. 209, l. 2, ll. 5-6 を参照。
- (8) *Abhidharmakośabhāṣya* 8.30, Pradhan 2nd. ed., p. 452, l. 20-p. 453, l. 5, p. 453, ll. 9-10 ; 8.31, p. 454, ll. 5-16, *Abhidharmakośavyākhyā*, Wogiwara ed., p. 686, l. 16。本文中の記述は、櫻部・小谷・本庄『俱舍論の原典研究：智品・定品』大蔵出版 2004年, pp. 318-319, 321, 326-327に基づく。
- (9) 平野前掲論文 p. 86には、山田竜城『大乘仏教成立論序説』平楽寺書店 1959年, p. 59, p. 463が捨を外教的とすると述べられる。これは七覚支の捨に関してである。
- (10) 高木前掲書 p. 149。
- (11) Bronkhorst, “Patañjali and the Yoga sūtras”, p. 202, p. 203.
- (12) 同 pp. 193-194, p. 197。
- (13) 中村元『ヨーガとサーンキヤの思想（中村元選集 [決定版] 24巻）』春秋社 1996年, p. 134, 注5は、仏教外の苦行者たちは信・勤・念・慧の四種を尊んでいたが、仏教がそれを取り入れ五根を成立させ、この体系化されたものをヨーガ派が取り入れたとする。ジャイナ教資料については Jacobi, “Über das ursprüngliche Yogasystems”, p. 708。
- (14) 中村『慈悲』p. 45, 注23による。原文は Jacobi, “Über das ursprüngliche Yogasystems”, p. 708, l. 14 によれば “maitrīpramodakāruṇyamādhyasthyāni sattvaṅuṇādhikakliṣyamānāvīneyeṣu” である。

